

あ い さ つ

第95号「三好教育研究所 所報」の発行にあたり、ごあいさつを申し上げます。

本年度も、皆様方のお力添えによりまして、三好教育研究所の研修および研究諸事業を次のように展開することができました。

4月には、「新任管理職研修会」を開催し、学校事務についての研修を行いました。6～8月にかけて、学校運営について継続研修を開催し、学校組織のリーダー育成に努めました。また、小学校教育研究会のへき地教育部会および情報教育部会との連携により、三好地域の特色ある研究を推進することができました。

8月には、三好教育会主催、本研究所主管により第63回三好教育研究発表会が開催され、研究主題「未来を切り拓き、心豊かにたくましく生きる子どもの育成」のもと、研究協力校である井内小学校、三加茂中学校および本研究所員の研究実践が発表されました。

さらに、「小・中学校におけるインターネット利用の実態と学校での指導の在り方について」の演題で、専門家による講演会も併せて開催いたしました。三好地域での小中学生のインターネット利用の実態調査にもとづいて、今後指導すべきことや保護者への働きかけなど、子どもの生活に直結するたいへん興味深い内容でした。氾濫するインターネット情報とそれを扱う危うさは、都会に限らず三好地域でも例外ではありません。ネット環境が整備されている三好地域では、容易くインターネットが利用できる反面その危険と常に接点があります。このことから、正しく安全な利用について、保護者と連携した指導の必要性を強く認識させられました。本講演会により、地域内各小中学校における情報モラルに関する意識の向上を図ることができたと思います

さて、本年度も現場の先生方に研究委嘱をし、その実践と成果のまとめを研究所報に掲載させていただきました。

(研究内容の紹介)

- ・人や物とのかかわりによって子どもの心身の成長を促す（幼稚園）
- ・アイデア満載の読書活動により子どもの読書意欲を高める（小学校）
- ・単元の中心概念に迫る「問い直し」を通して思考力・判断力を育む（小学校）
- ・多彩で計画的な「朝の活動時間」の継続により心と体の成長を図る（小学校）
- ・自然や人との交流体験を効果的に活かして1年生を育てる（小学校）
- ・学校行事（オリエンテーリング）を通して自分・地域再発見を図る（中学校）
- ・インターネットと人権の学習を通して人権問題解決の実践力を身につける（中学校）

どのご研究も、昨今の教育課題に迫る貴重な内容となっています。研究実践に真摯に取り組まれ、その成果をご寄稿いただきました先生方に篤くお礼を申し上げます。

最後になりましたが、本研究所の事業に対しご尽力くださいました各関係機関並びに関係の皆様方に心より感謝を申し上げますとともに、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻をいただけますようよろしくお願いいたします。

平成27年3月

三好教育研究所長 吉田美千代

目 次

あいさつ

三好教育研究所 所長 吉田 美千代

————— 委嘱研究員研究 —————

- 笑顔、やる気、元気がいっぱいの幼稚園をめざして……………1
～様々な人々との交流を通して～

三庄幼稚園 教諭 田岡 明美

- 主体的に読書をしようとする子どもの育成をめざして……………4
～子どもの読書活動を推進するために～

昼間小学校 教諭 大西 三千代

- 単元を中心概念に迫る「問い直し」を通して、思考力・判断力を育む社会科学習 ……………8

王地小学校 教諭 木村 栄治

- 川崎で育てる力……………15
～朝の活動の取組を通して～

川崎小学校 教諭 濱本 恭代

- 自分のよさや可能性に気づき、主体的に取り組む児童の育成を目指して ……………19
～人や自然とのかかわりを通して～

下名小学校 教諭 喜多 芳恵

- 「生きる力を培う学校行事（オリエンテーリング）」……………22
～自分・地域再発見～

三加茂中学校 教諭 佐藤 篤史

- 人権問題を解決する実践的な行動力を身につける取り組み……………25
～インターネットと人権の学習を通して～

井川中学校 教諭 伊藤 憲志

- 平成26年度 三好教育研究所事業報告 ……………29

- 歴代委嘱研究員一覧（平成元年～）

笑顔，やる気，元気がいっぱいの幼稚園をめざして ～様々な人々との交流を通して～

三庄幼稚園 教諭 田岡 明美

1 はじめに

近年，家庭における子どもの数が少なく，過干渉や過保護の傾向が見られ，受け身で依頼心の強い子どもや自己中心的な子どもが少なくない。また，兄弟，姉妹や地域社会における同年代の子どもや高齢者などとの触れ合いが少なく，人間関係の希薄化もまねいている。また，地域社会や環境に対する不安から安心して遊べる場所や自然と触れ合う機会が少なくなっている。このように子どもを取り巻く環境は変化し，その生活や遊びも変容してきている。子どもたち一人一人が自分らしさを発揮し，自信をもち，豊かな人間性を身につけていくためには，安心して自分を発揮できる環境や自分を受け入れてくれる温かい人間関係が必要であると考えます。

2 研究の目的

本園は一年保育，5歳児男児18名，女児12名計30名の中規模園である。ほとんどの子どもが集団生活の経験があり，とまどうことなく園生活が進められ，気の合う友達との遊びを楽しむ姿が見られた。しかし，自分の思い通りにならないと怒ったり，すねたり，友達を困らせたりするなど，様々な子どもの姿が見えてきた。友達との遊びの中で，自分の思いを上手く伝えられなかったり，子ども同士の会話の中で言葉の取り違いをし，トラブルになったりするなど人と上手くかかわれないこともよく見られる。また，自分で判断し，考えて行動することができない子どもや，すぐに諦め，最後まで頑張れない子どもなど，困難や葛藤を乗り越える力が弱い姿なども見られた。

そこで，園生活の中で子どもたちが多様な体験を通し，様々な人たちとの交流をする中で，それぞれが自分の力を発揮し，共に育ち合える仲間づくりをめざしたい。そして，その育ちを促す様々な場における教師のかかわり方やあり方について実践を通して考えていきたい。

3 研究の方法

(1) 次の3つの視点を据えて実践を進め，その中での指導の実際と子どもの姿を記録し，分析考察する。

- ① 一人一人の実態を把握し個々にあった支援をしていく。
- ② 様々な人との交流を通して，相手の良さに気づき，自分の良さを感じ取れるようにしていく。
- ③ 家庭との連携を密にし，子どもの育ちについて共通理解をし，保育をすすめていく。

(2) (1)の結果を踏まえて，教師のかかわり方を改善していく。

4 実践例

(1) 事例1 四国大学との交流 (5月～12月)

本町では，平成23年度より四国大学との交流をして，園児の運動能力やコミュニケーション能力等の向上をめざす「アクティブプラン」を進めている。子どもを取り巻く環境で不足がちな『仲間』『運動』『コミュニケーション』を連携し支援していくもので，園生活や地域での生活を活性化していくことを目的とし取り組んでいる。昨年度より「5歳児の望ま

しい動きの獲得について」の研究テーマのもと、四国大学と町内幼稚園との共同研究を行っている。「ラダー」と呼ばれるはしご状の用具を用いて、基本的な運動を行い（歩く・走る・跳ぶ）などの動きをすることで、基礎の動きを獲得する取り組みを行い、子どもたちの体力向上を図っている。

① 「ラダーってなに？」 4月中旬

「あれ、なに？」「なにをするものやろ？」遊戯室に置いているラダーを見ながら不思議そうにしている子どもたち。「みんな、これはラダーっていうんよ。見て、こうするんよ」と、教師がラダーの上を歩いて手本を見せた。「みんなもやってみるで」の合図に子どもたちが順番に歩く。「上手く歩けんわ」「枠を踏んだらいかんよ」と口々に話す声が聞こえる。「手を振って、足をしっかりあげて、元気よく」の教師の声に一層元気にラダーの上を歩く子どもたち。N子の順番になった。じっと立ち止まったまま動かない。「大丈夫、ゆっくりしたらいけるよ」「Nちゃんががんばれ」「わたしもできたけん、いけるよ」と応援する声が聞こえてきた。

遊戯室に置いてあった、ラダーを初めて目にする子どもたちに名称やどのように使用するかを知らせた。初めは、ゆっくりと手や足を動かしながら、慎重に動いていった。個々の運動能力に合わせて取り組ませていった。運動が苦手な子どももいたが、友だちからの励ましや、出来たときの達成感等を味わうことで自信もつき、意欲をもって参加できていた。ラダーは遊戯室の一角に置いておき、子どもが自由に使用できるようにしていた。また、水曜日の9時からをチャレンジタイムとし、みんなでラダー活動に取り組むことにした。N子も回数を重ねることで正しい動き方を知り徐々に楽しく活動に参加できるようになってきている。



② 「頑張れ。みんな！」 11月中旬

水曜日の9時になると、みんな遊戯室に集まりラダーの前に並んで待つ。「先生、今日はどうするん？」とR男。「ケン・ケン・パーとケン・ケン・ゲーしょうかな」と教師。「かんたん、できる、できる」とテンポ良く跳ぶ。運動が苦手なM子もゆっくりだがバランスを崩さず跳んでいる。「M子ちゃん、すごい。頑張れ。頑張れ」の友だちの応援の声に励まされながら最後まで枠を踏まずに到達した。「うまくできたな」の声に嬉しそうなM子であった。

4月より取り組んでいるラダー活動も、子どもたちの生活の中の一部として習慣化されてきた。5月と10月には四国大学の先生による指導や12月には町内合同での『親子で楽しむ運動遊び』を行った。子どもたちは活動を進めていく中で、自主的に自分たちで活動が進められるようになってきた。バランス感覚や敏捷性、また、テンポよくリズムを取るための集中力や巧緻性などが養われてきている。活動の中で、個々の頑張りを認め、励まし、褒めることで子どもの次への活動の意欲も高まり、新しいことにも積極的にチャレンジできるようになってきた。また、友だちと一緒に励ましあったり、競争したりするなど生活の中でも刺激し合って、頑張る姿が見られた。

(2) 事例2 地域・一年生との交流

5月に地域の方の畑に一年生と一緒にサツマイモの苗を植えた。11月になりサツマイモの収穫が出来るとの連絡があり一年生と一緒に芋掘りに出かけた。

① 「芋掘り」 11月5日

「お芋が掘れん」とR。「どれ、一緒に掘ったげる」とS。畑の畝に向かい合った園児のRと小学生のS。芋が土の中から見えては抜こうとしているが、なかなか掘れない。「まって、まだじゃ」と言いながらSが土を掘る。もう少しで穫れそうになると、Rに「掘ってみ」と、促した。土の中からサツマイモを収穫したRは「ありがとう」とSに言いながら、掘った芋をみんなに嬉しそうに見せていた。

一緒に苗を植えた畑に到着すると、おじさんたちが待っていてくれた。子どもたちが、芋掘りがしやすいように朝早くから準備をしてきていた。昨年、芋掘り経験をしていた一年生は幼稚園児に収穫の仕方を教えたり、助け合ったりしながら一緒に芋掘りができた。収穫までの大変さを知り、お世話してくださった人に感謝することや収穫の喜びを味わうこともできた。



<結果と考察>

- ・園生活の中で、転んだり、ぶついたり、「疲れた」「打った」と教師に訴えてくる子が多く見られた。動きがぎこちなく、平衡感覚がとれずその場に応じた動きが出来ていない様子であった。チャレンジタイムで楽しみながら運動をすることがきっかけとなり、生活の中で個々の頑張り認め、励まし、褒めることで子どもの自信となり、次への活動への意欲が高まり、進んで新しいことにも取り組むことができるようになってきている。
- ・誰もが「やってみよう」「やってみたい」という活動を取り入れてきた。その結果『自分にもできた』『やったあ』という満足感、達成感を多く味わうことで、一人一人が自信をもって活動に取り組む姿が見られるようになってきた。
- ・様々な人たちとの交流は、私たち教師や子どもたちが多くのことを学ぶいい機会となっている。出会った人からあたたかい言葉や意欲につながる言葉をかけてもらうことで相手に対して親しみをもち安心してかかわることができると思う。また、共に楽しみ共感しあう体験を通して人とかかわることの楽しさを味わうことができたのではないだろうか。また、交流活動の後の話し合いの場をもち内容や育てたいことの共通理解を図り、さらに効果的な活動にしていきたいと思う。
- ・教師と保護者間で共通理解をし、協力体制を築くことにより、幼児理解を深め適切な環境構成や一人一人にあった援助ができるようになってきている。

5 おわりに

私たち教師は一人一人の子どもの思いに関心をよせ、共感しながらその動きにそった援助やかかわりが必要である。そのためには、幼児理解をさらに深め、見直しながら保育を進めていきたいと思う。また、様々な人々との交流が子どもたちの育ちに有効なものになるためには、それらが一過性のものでなく継続性があり計画的であること、かかわる人との連携を密にし、協力体制を構築することが大切である。そうしたかかわりの中で、子どもたちは周りの人たちと豊かにつながり、心地よさを味わいながら安心して自分を発揮することができるようになると思う。日々の保育の中で私たち教師は、子どもたちの喜びを喜びとし、悲しみを分かち合い、感動を共有しながら子どもたちがともに育ちあえる仲間づくりができるように丁寧にかかわり、子どもたちの笑顔、やる気、元気いっぱい満たされる幼稚園をめざして、日々の保育に取り組んでいきたい。

主体的に読書をしようとする子どもの育成をめざして ～子どもの読書活動を推進するために～

昼間小学校教諭 大西 三千代

1 はじめに

人は読書活動を通して多くのことを身に付け、学ぶことができる。特に子どもにとって読書はさまざまな発見や感動、知る喜びをもたらし子ども自身の世界を広げるきっかけになる。

学校図書館は、「学校教育において欠くことのできない基礎的な設備」（学校図書館法第1条）であり、「学校の教育課程の展開に寄与するとともに、児童又は生徒の健全な教養を育成すること」（同法第2条）を目的として設置されている。21世紀を担う子どもたちに生涯にわたって生きて働く学力を育てるため、学校図書館の果たすべき役割は大きいと思われる。

2 本校の図書館教育に関する実態と課題

本校では、業間と昼休みに図書委員が交代で当番を行い、図書室の本の貸し出しを行っている。本を借りるだけでなく、図書室の本を静かに読んでいる児童も数名いる。特に、雨の日は図書室を利用する児童が多い。

本校の図書館教育に関する課題として次の3点が考えられる。

①図書室の本を借りにくる児童が限られている

7月末の時点での図書の貸し出しを調べてみると、4ヶ月の間に一番たくさん借りている児童は74冊であったが、1冊しか借りていない児童が24人もいた。また、5冊以内の児童も64人と全体の38%もいた。

②家庭での読書時間が少ない

平成25年の9月に行った読書の生活科プロジェクトⅢの結果、1週間の間に「全く読まなかった」と「10分未満」の児童が全体の半分近くいた。2月の時点では10分未満は減り、10分から30分の児童数が増加している。しかし、全校の40%の児童は10分未満であった。

③子どもたちに読んで欲しい本がほとんど貸し出されていない

本校の図書館での人気のある本

- 1 サバイバルシリーズ
- 2 まんが人物館
- 3 ミッケ、どこどこセブン、〇〇の迷路シリーズ

マンガで表現されている本やまちがいさがしのように視覚的にとらえるものが主流で文章から想像を膨らますものは少ない。また、昨年度、厚生労働省からでた「子どもたちに読んでほしい本49作品」の中から小学生向けの本と、夏休みの研修で紹介してもらった読み聞かせによい本を購入したが、そのコーナーを見ると代本版がほとんど入っていない状態であった。そこで、これら3つの課題に対する取り組みを行うことにした。

3 研究の実践

(1) 昨年度に引き続き行った取り組み

①教職員による読み聞かせ

教職員が1ヶ月に1回、輪番制でいろいろな学年に入り、読み聞かせを行った。その際、大型絵本を使用したり、人形を使ったりと工夫を凝らした教師の読み聞かせに魅入っている様子だった。



②図書への導入

- ・子どもたちからのリクエスト
- ・厚生労働省からでた「子どもたちに読んでほしい本49作品」の中から小学生向けの本を購入
- ・「とくしまの子どものためのブックリスト100」の本の購入

③図書委員による「読書集会」

図書委員が、「子どもの読書週間」の時は朝会で読み聞かせを行った。また、「読書週間」では、読書集会を計画し、おすすめの本を紹介したり、読書に関するクイズをしたりした。



④読書賞

昨年度図書室の本の貸し出しが100冊を超えた児童の表彰を行った。朝会で表彰することで、他の児童への意欲にもつながると思われる。

(2) 今年度新たに行った取り組み

①家庭での読書を啓発するおたよりの発行

「毎月23日は家庭読書の日」として毎月23日は、家庭での読書をすすめる、おすすめの本を紹介する図書便りを発行している。また、昼の放送で全校に呼びかけ、学級でも担任が声をかけてくれたことでその前後は図書の貸し出しが増えた。

- ・季節によるおすすめの本
 - ・校長先生のおすすめの本
 - ・昼間小学校の本の貸し出しの状況
 - ・読書の生活科プロジェクトの結果
- などの内容で保護者への啓発を行った。

11月23日は 家庭読書の日です

読書集会をしました

10月27日の朝会の時間に読書集会をしました。図書委員会の子どもたちがおすすめの本を選んで紹介したり、昼間小学校にある本のクイズをしました。また、毎月「読書の日」もはじまりました。すべての作品を他の友だちにも紹介するほか、読書委員会の子どもたちが配達しています。集会の時には、参加してくれた人の作品を紹介しました。

11月15日～19日は本の貸し出しが少し減っていました。これから夜が長くなってきます。読書の生活科プロジェクトに親しむなど読書の時間を作ってほしいと思います。

校長先生のおすすめの本

下学年におすすめの本	上学年におすすめの本	読書者におすすめの本

※昼間小学校の図書室にあり、貸し出ししています。

②スタンプラリーカードの導入

厚生労働省からでた「子どもたちに読んでほしい本49作品」を目立つ場所においているが、子どもたちは自分たちの興味がある本を借りることが多い。しかし、迷っているときに、「この本はおもしろいよ。」と声をかけると「じゃ借りてみよう。」と言って借りる子もいる。そこで子どもたちに教師が読んでほしいと思う本を選ぼうとする手だてとして、「昼間小学校おすすめの本ラリーカード」を作成した。

ラリーカードは5種類作成した。

おすすめの本①「徳島ブックリスト100」の低学年に読んでほしい本

②「徳島ブックリスト100」の中学年に読んでほしい本

③「徳島ブックリスト100」の高学年に読んでほしい本

④厚生省からでた「子どもたちに読んでほしい本49作品」の下学年

⑤厚生省からでた「子どもたちに読んでほしい本49作品」の上学年

図書室にスタンプラリー用の本のコーナーを作った。高学年でも低学年用のカードが選べるように自分でカードを選ばせるようにした。

1枚のカードのスタンプを全部押せた児童は朝会で図書委員会から認定証をおくり、他の児童への意識付けを行った。

③読書ゆうびん

読書週間の時に、昼間小学校の友達や先生にすすめたい本を紹介するはがきを書き、それを図書委員が届ける「読書ゆうびん」をした。参加してくれた児童の作品を読書集会の時に紹介した。読書週間が終わった後も図書室の前に郵便受けを置いて読書ゆうびんを続けている。



④本の題名しりとり

図書委員会で読書週間で取り組んでみたいことを話し合った時、

「本のしりとり」という案がでた。そこで、読書集会の時に紹介し、しりとり用のボードを用意した。

読書週間の間に用意していたボードは全部しりとりで埋まった。しかし、限られた子しか参加していなかったので、次にする時は、「学年を指定する」などの工夫が必要と思われる。



4 成果と課題

①「図書室の本を借りにくる児童が限られている」について

12月の時点での図書室での本の貸し出しは、7月と比べると下の表のような結果であった。

1～20冊までの内訳は

1～5冊 13%

6～10冊 19%

11～20冊 23%であった。

約半分の児童は20冊以上借りていた。

学級には学級文庫があり、空いた時間

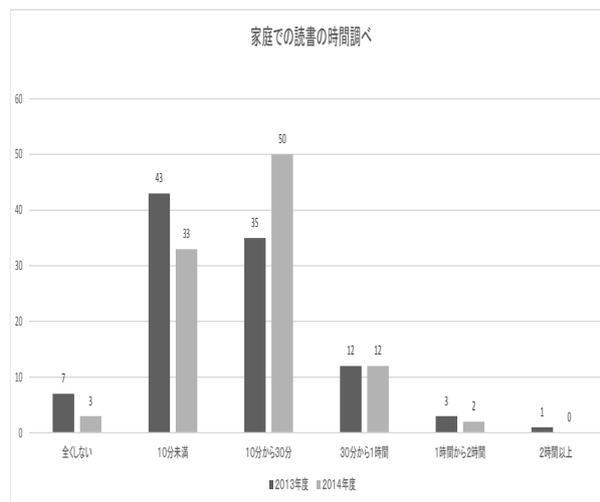
があれば読書ができる環境にある。学級

文庫の本の中にも児童が好みそうな本がたくさんあり、昼休みや業間のような長い休み時間は運動場や体育館で体を動かしたい児童も多いので、図書室へ足をあまり運ばないと考えられる。

	7月	%	12月	%
1～20冊	137	81	93	54
20～40冊	27	16	54	32
40～60冊	4	2	17	10
60～80冊	1	1	4	2
80～100冊			1	1
100冊以上			2	1

②「家庭での読書時間が少ない」について

家庭への啓発を行うことで、10月に行った家庭での読書時間調べ（2013年度との比較したグラフ）では、昨年度と比べると、「全くしない」や「10分未満」の割合が減り、「10分から30分」の割合が増えてきた。しかし、10分未満の児童が全体の36%にいたので、今後も家庭への啓発と児童が家でも本を読みたいと思う活動をすすめていく必要がある。



③「子どもたちに読んで欲しい本がほとんど貸し出されていない」について

昼間小学校おすすめの本のスタンプラリーカードを作成したことで9月から12月までの図書の貸し出しの多い本は、

- 1 おふろだいすき
- 2 もこもこ ぼっぼライブラリ
- 3 一期一会 恋の魔法 友の魔法
- 4 一期一会 恋いホロリ
- 5 がたんごとん がたんごとん

となった。その他にも1学期にはあまり借りられていなかったスタンプラリーカードの中の本が以前に比べると借りられるようになった。「ぐりとぐら」「スイミー」「じごくのそうべえ」「おさるのまいにち」などが多く借りられた。

しかし、スタンプラリーカードから借りられた本の多くは絵本で、文章の長い本はあまり借りられていない。

5 おわりに

子どもたちが読書活動をすすめていくためには、教師や保護者が多くの情報を得て、よい本を準備するなどの環境を整えることが大切である。しかし、児童の心を育てることが期待できる本を準備しても児童がその本を選択しなければ、読まれることはない。本と出会う機会を作り、本の楽しさを伝え、読書を好きになるように積極的に関わっていくことが大人に求められる。継続して読書活動を行うことにより、その楽しさがわかり、本を読むための力もついてくると思われる。

クラスの友達全員に送るという目標を立てて読書ゆうびんを書いている児童がいる。その児童は「クラスの子、全員に書いたら他の学年の子にも書きます。」と言っていた。その児童のような思いの子が増えるように今後も取り組んでいきたい。

単元の中心概念に迫る「問い直し」を通して、思考力・判断力を育む社会科学学習

三好市玉地小学校 教諭 木村栄治

1 研究主題について

本校は三好市の東端に位置する全校77人の小規模校である。児童は明るく活動的で、休み時間になれば元気に運動場で体を動かす児童が多数見られる。また、縦割り班活動の伝統が長く、学校生活の至るところで上の学年が下級生を支えている姿が見られる。

近年、我が国では自然災害が頻発しており、学校でも防災教育の充実が望まれている。本校の防災教育は、定期的実施している避難訓練や学校行事における消火訓練があるが、体験的な活動が主で知識・理解面で不十分なところがある。また、5年生社会科で防災が観点の単元が設定されてはいるものの、掘り下げて学ぶまでには至っていない。

今回取り上げる単元「自然災害から命・生活を守る」は、自然災害に対する防災・減災についての学習を行う。我が国は2011年に東日本大震災という最大級の災害が発生した。が、それに留まらず、南海トラフ地震がいつ起こってもおかしくないという現在、防災・減災が国をあげての喫緊の課題であり、小学校社会科で今後扱う現代的課題の一つとしてもあげられなければならない。本単元の学習を通して、児童が自然災害に対する理解と防災に向けた社会での取り組みについて理解させる。そして最後に、実際に自分たちの住む町で自然災害が起こった時、状況に応じた正しい判断・行動がとれる素地を授業で養っていく。

本学級の児童は、個性豊かで活発な児童が多い。学期が進むにつれ、学習に落ち着いて取り組めるようになり、課題意識をもって学ぶこともできはじめた。一学期の単元「山地の人々の暮らし」で三好市東祖谷の落合集落を取り上げた際、児童は「この急斜面で災害が起こったら、集落にはどんな影響が出るんだろう」という防災の視点をもって学習に取り組むことができた。調べ活動を通して、石垣の修理のために石積みをしたり、地域内で協力して生活したりしていることを理解した。しかし一方で、自分たちの住む地域や日本全体で、何が原因で自然災害が起こり、どのような被害を受けているのか、また被災時にどう対応すればよいかは理解できていない。

本単元ではまず、近年日本で起こった大きな自然災害について調べる。調べていく内に、その発生件数の多さと被害の甚大さに気づくことが予想されるので、続いて日本がなぜ自然災害が起きやすい国なのかを学習する。ここから学習問題を設定し、自然災害と自分たちの暮らしや国内産業への影響について調べていく。取り上げる事例は、阪神・淡路大震災と東日本大震災である。被災することで、多くの人命が失われ、ライフラインが絶たれることで困難な暮らしを強いられることを学習する。また、放射性物質が放出されたことで広範囲に甚大な被害が出たことや、被災することで国内産業まで大きな打撃を与えることに気づかせる。そして、自然災害の被害を防ぐために、国や都道府県、市町村では、それぞれどのような対策に取り組んでいるのかを調べる。最後に、釜石市の防災教育を取り上げ、「率先避難者たれ」などの被災時の基本姿勢を子ども達自らでつかみ、理解させたい。

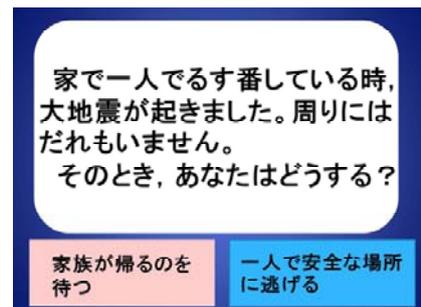
2 研究の視点

視点1 思考力・判断力を育む社会科授業と言語活動の充実

徳島県の小学校社会科は、三層六段階を基本とする学習過程をもとに進められてきた。この問題解決的な学習の中に、価値判断・意思決定する学習場面を意図的に設定し社会的判断力の育成を目指したのが、平成22年度全国小学校社会科研究協議会研究大会である。調べた知識を根拠として社会的事象の意味について互いに意見を交換する中で、よりよい社会を形成しようとする意欲を育む授業・研究発表がなされた。

一方で、研究を振り返って「問題解決的な学習が形骸化していること」、「始めに価値判断・意思決定の場面設定ありきでは、単元構成で無理が生じないか。」また「社会的判断力を育むための授業は、どのような単元で実践することがより効果的か。」という課題も残った。

これらをふまえて今回の研究では、【広げ深める活動】において価値判断・意思決定の場面を設定する。児童は前の段階までに日本の自然災害の実態を理解した上で自治体の防災対策について理解を深めている。ここでまとめて単元を終えるのではなく、学んだ知識を実生活に生かすために「災害時クロスロードゲーム」を行う。このクロスロードゲームでは、三野町で実際に大地震が起こったとき自分たちはどう行動するのかを具体的に考えさせる。その際、東日本大震災における岩手県の小学生の避難事例を持ち出して比較・再検討する。その後、総合的な学習の時間の「防災学習」にリンクさせ、王地地区のハザードマップを自分たちの手で作成する。このように、防災・減災に対する知識と思考力・判断力を育むことを通して言語活動の充実を図る。



災害時クロスロードゲーム

視点2 自然災害に関する単元の開発・教材化

より切実感をもって主体的に学べる単元づくりをどうするか。平成27年度より教科書採択が一新されるので、これを機に教科書会社四社の内容を比較検討した。その結果、「日本文教出版」の内容をベースとして、本研究を進めていくことにした。

導入段階では、より身近な題材として、三野町の地形的な特徴（地下には中央構造線が東西に走っている。王地地区の地形が扇状地である。）に目を向けさせる。また単元後半には、東日本大震災の事例を取り上げる。具体的には、被災しながらも、生存者がほぼ100%であった鶴住居小学校・釜石東中学校の避難事例、いわゆる「釜石の奇跡」を取り上げ、被災時におけるとるべき行動について考えさせる。

視点3 授業展開における中心概念に迫る「問い直し」

【みんなで確かめる活動】の終末において、自治体や地域の防災の取り組みをふまえて、児童は「率先避難者たれ」「津波でんでんこ」という防災の基本方針にふれる。これは釜石市が度重なる津波被害を経験したことをもとに、代々語り継がれてきた伝承語句である。

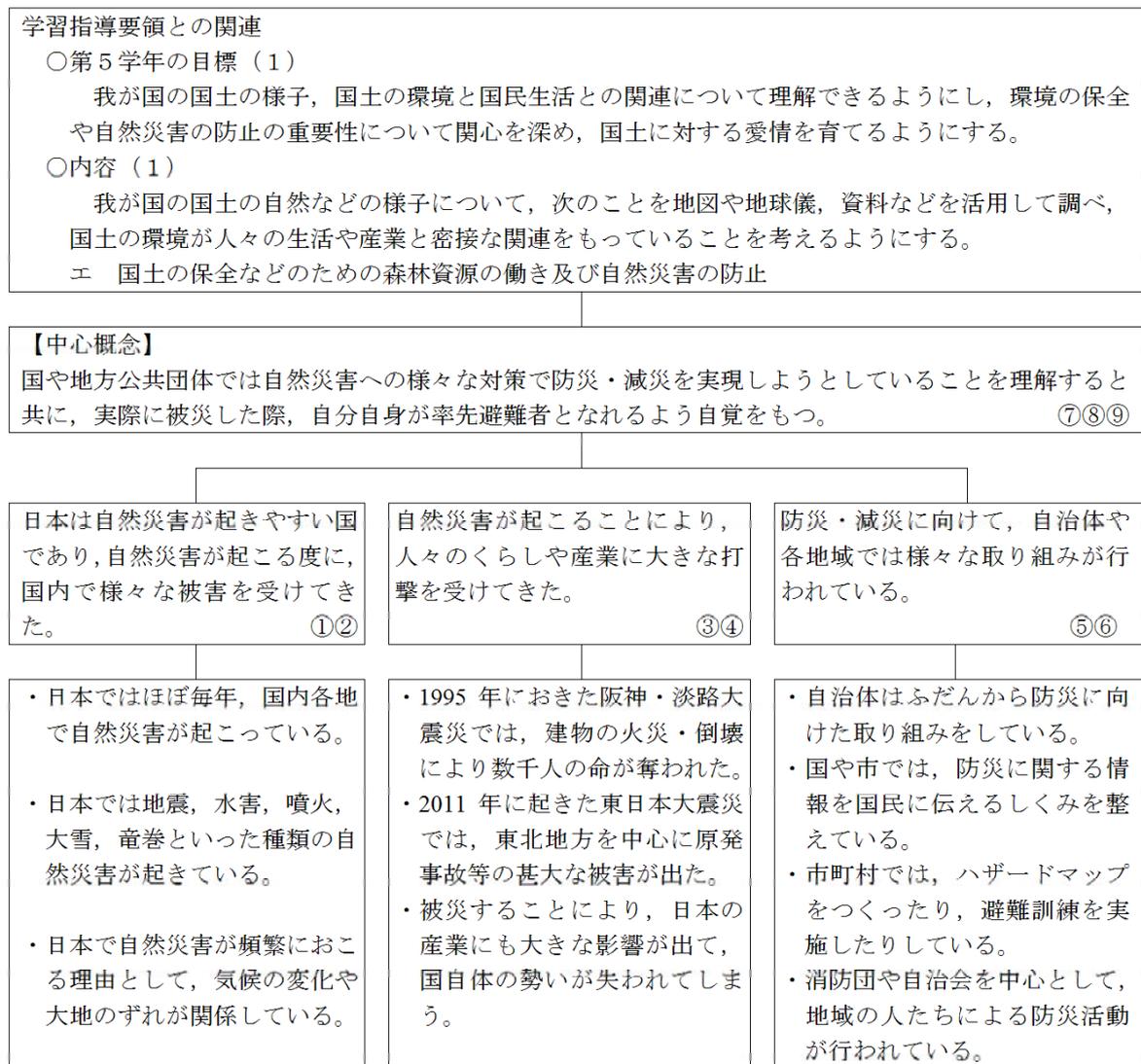
しかし、この中心概念を児童一人一人がどこまで理解できるか。国内最大級の被災事例とはいえ、大津波ということで児童にはどこか遠くで起きた出来事としか考えら

れないと予想される。そこで、【広げ深める活動】で中心概念に迫る「問い直し」を行う。直接的に社会的事象の意味を問い直すのではなく、既習事項がどれだけ自分の生活に反映させることができるかを確認する。その確認方法として二つの資料を提示する。①動画「釜石東中・鶴住居小の避難ドキュメント」と②岩手県釜石市「避難三原則」である。東日本大震災の際、そのとなりに位置する宮城県では児童・生徒の生存率は低かった。その理由として「家族を気遣い、自宅へ戻った。」「避難のお年寄りを手伝った。」「自宅の二階へあがって様子を見た。」等、津波避難を優先せず、他の行動をとっていたことが原因によるものだ。被災時に本当に為すべきことは何か。両資料を提示することで、避難行動としてとるべき行動を自らつかませる。



3 単元計画

①学習内容の構造



② 展開の概要

学習活動	教師の支援	評価規準
<p>1 単元の学習問題を決め、学習の計画を立てる。(2時間)</p> <p>① 日本では、頻繁に自然災害が起きていることを知る。</p> <p>② 日本は、自然条件の重なりにより、自然災害が起きやすい国であることを知る。 自然災害が自分たちの暮らしに大きな影響を与えることをふまえて学習問題をたてる。</p>	<p>(1) これまでニュースや新聞で見た経験をもとに、どこで何が起きたか予想させる。</p> <p>(2) 日本付近には火山、プレートが位置し、台風が頻繁に通過する場所であることに気づかせる。</p>	<p>・日本でおこった自然災害について主体的に調べようとしている。【関・意・態：発言】</p> <p>・自然災害が起きやすい理由について主体的に調べ、その原因を考えている。 【関・意・態：ワークシート・発言】</p>
<p>自然災害の様子やその生活への影響を調べ、くらしや命を守るためにどのような取組が大切なのかを考えよう。</p>		
<p>調べる内容や方法について計画を立てる。</p>		<p>・学習問題を考え、調べる目的を明確にもっている。 【関・意・態：ワークシート】</p>
<p>2 日本が自然災害によって被災した様子について調べる。(2時間)</p> <p>③ 自然災害が起こることで、自分たちの暮らしはどうなるのか調べる。</p> <p>④ 災害により、産業にどのような影響が出るか調べる。</p>	<p>(3) 家屋の倒壊やライフラインが絶たれることで、生活が困難を極めることを理解する。</p> <p>(4) 被災することで、国の全体の勢いが失われてしまうことに気づかせる。</p>	<p>・調べ活動を通して、被災した様子や産業への影響について理解することができている。 【知・理：ワークシート，発言】</p>
<p>3 自然災害に備えるために、社会ではどのような取り組みがあるのか確かめる。(2時間)</p> <p>⑤ 国や都道府県、市町村が防災のためにふだんから取り組んでいることを調べる。</p> <p>⑥ 自分たちの地域でできる防災について考える。</p>	<p>(5) 自然災害に備えるために、身の周りには、様々な防災施設があることをとらえさせる。</p> <p>(6) 自分たちの地域は自分たちで守るという意識をもたせる。</p>	<p>・防災施設について主体的に調べることができ、理解している。 【知・理：ワークシート，発言】</p> <p>・防災について、自分たちの手でできることを考えている。 【思・判・表：発言，シート】</p>
<p>4 将来、三野町で自然災害が起きたとき、どのような行動をとるか具体的に考える。(3時間)</p> <p>⑦ 災害時クロスロードクイズを行う。</p> <p>⑧ 「釜石市の奇跡（釜石東中・鶴住居小の避難）」と釜石式防災教育「避難三原則」について考える。</p> <p>⑨ 校内で防災を呼びかけるためのポスターづくりをする。</p>	<p>(7) 自分が被災した際、どのような行動をとるべきか、これまで学んだことを根拠にワークシートに書かせる。</p> <p>(8) 「率先避難者たれ」「津波でんでんこ」には、どのような意味があるのか考えさせる。</p> <p>(9) 学んだことをもとに、防災のために呼びかけたいことを考える。</p>	<p>・被災した際に、どう行動するのか、具体的に記入している。 【関・意・態：ワークシート】</p> <p>・前時に考えたことと釜石式防災教育の考え方を比較・再検討することで、被災時に取るべき行動を考えている。 【思・判・表：発言，シート】</p> <p>・一人一人が主体となる防災について伝えようとしている。 【技：パンフレット】</p>

③ 単元の目標

社会的事象への関心・意欲・態度	国内各地でおこる自然災害や防災のための取り組みについて関心を持ち、意欲的に調べようとしている。
社会的な思考・判断・表現	自然災害がもたらす影響や防災に向けた自治体がとる対策について、実際の自分たちの生活と関連づけて考え、ワークシート等に表現している。
観察・資料活用の技能	国内での自然災害や防災のための取り組みについて、資料を活用して調べ、その結果をわかりやすくまとめている。
社会的事象についての知識・理解	日本で起こる自然災害や産業・生活への影響について理解し、防災に向けて自治体や地域の人々が様々な対策に取り組んでいることを理解している。

4 研究の実際

学習活動 1. 単元の学習問題を決め、学習の計画を立てる。

- ① 長野県北部地震の様子やこの地震が起こった原因を示す画像等を見て、気がついたことを発表する。
- ② 道の駅「三野」の画像や中央構造線に関する資料について調べ、気づいたことを発表する。
- ③ 各資料から「台風の通り道である」「プレートの重なり・複数の断層」を確認することで、日本は自然災害が多い国であることに気づく。



【児童の感想・意見】

- ・日本はほぼ毎年、自然災害が起こっている。
- ・日本で降る雨の量は、世界平均を超えているし、西アジアの国とは比べものにならないくらい雨が多い。
- ・三野町の下に中央構造線が通っていることがショックだった。
- ・三野町で地震が起きたら、どんなことが起こるのか知りたい。

学習活動 2. 日本が自然災害によって被災した様子について調べる。

- ① 阪神大震災を例に挙げて、自然災害が起こった時、人々の暮らしがどう変わるのか調べる。
- ② 被災により、国内産業にどのような影響が出るのか調べる。

【児童の感想・意見】

- ・仮設住宅は被災した人にとって、とてもありがたい施設だ。
- ・せまい場所にぎゅうぎゅうになって生活している。外でおにぎりを食べるのはつらい。
- ・農地が流されたり、海水につかったりして、農業ができなくなるのはかわいそう。
- ・津波のせいで、トラックや水産物加工施設がめちゃめちゃになっている。
- ・自力で助かった人が多いのが、意外に多くてびっくりした。
- ・救助隊があまり助けられなかったのは、救助しにくるのがおそいからかなと思う。
- ・「共助」がたくさんされていていいなと思った。

学習活動3. 自然災害に備えるために、社会ではどのような取り組みがあるのか確かめる。

- ① 国や地方公共団体が防災・減災のために、どのような取り組みをしているのか調べる。
- ② 各地域や自分たちで防災・減災のためにできることは何か考える。

【児童の感想・意見】

- ・地震の強いゆれにも耐えられるように補強する施設がある → 王地小学校と同じ
- ・大地震の場合、「公助」には限界がある。なので、自分の身は自分で守る（自助）ことが重要だと思う。
- ・いざという時、助け合えるように近所の人とあいさつをする。

学習活動4. 将来、三野町で自然災害が起きたとき、どのような行動をとるのか、具体的に考える。

- ① 災害時クロスロードクイズを行い、三野町が被災した際のシミュレーションをする。
- ② 東日本大震災における岩手県・宮城県の小学生の避難事例を学習して、被災時にとるべき行動について考える。
- ③ 学んだことを校内に向けて発信するために、防災ポスターづくりの計画を立てる。

【児童の感想・意見】（動画を視聴して）

- ・宮城県の小学生は、津波のスピードが予想より速くて、逃げ切れなかった。
- ・訓練と本番では全然違う。
- ・避難しても、そこが安全だと思えない。
- ・自分の判断が大切だ。
- ・自分の命は自分で守る。
- ・「津波てんでんこ」は、多くの津波がきた地区で、身を守るため考えぬいた知恵だということがわかった。



釜石(かまいし)式防災教育

避難三原則

- ① 率先して避難せよ
- ② 最善をつくせ
- ③ 想定にとらわれるな

5 研究の成果と今後の課題

【単元終了後の児童の感想】

クロスロードゲームでは、一人です番している時、大地震が起こるとどうするかという問いを考えました。ぼくは「家族を待つ」という選たくをしました。しかしこの選たくは間違っていました。東日本大震災の時、宮城県大川小学校の子ども達は、ほとんどがなくなりました。

三野町にも大地しんが来るかわからないので、ちゃんと訓練に取り組み、死ぬ気で逃げて、生き残ります。

かま石東中学校とうのすまい小学校は、亡くなった人がほとんどいなくて、なんでだろうと思いました。それは「ひなん三原則」を決めていて、それを守るだけで亡くなった人はほとんどいなくなるのです。これは、すごいなあと思いました。

ぼくは、クロスロードゲームで仲のいい友達がいなくても各自の責任で逃げるということは、大切なんだと学びました。でも家族がいなかったら、後もどりをしてしまいそうなので、自分の命は自分で守りたいです。

かま石東中学校とうのすまい小学校の人たちは、「ひなん三原則」をちゃんとみんなが守ったから、ほぼ全員が助かりました。三野町で大地しんが起きた時、生存率を100%にするために、みんなで約束事を決めたらいいと思いました。

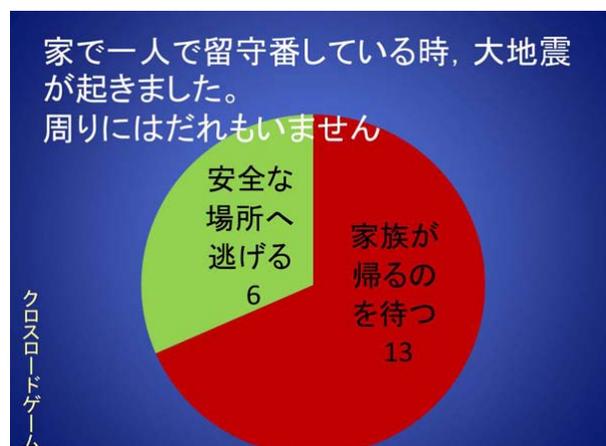
視点1について、学んだことを根拠に思考・判断を行う方法として、クロスロードゲームを行ったが、この手法により、子ども達は今まで以上に主体的に考えることができた。問題の内容すべてが身近な状況を設定したので、自分が被災した状況を具体的に考えることができていた。考えた結果に対する判断基準として、東日本大震災の事例を持ち出したので、児童は自分の判断の善し悪しについて明確に振り返ることができた。

視点2について、教材として鶴住居小学校・釜石東中学校を取り上げたことで、児童の心に響くものがあり、主体的な取り組みが見られた。授業研究会の際、「山間部の児童が、海岸部の事例を学ぶことは有効なのか」という問いが出てきた。しかし講師より、「5年生という発達段階から、教材はすべてがすべて、地域教材である必要はない。今回のように、敢えて異なる地域を取り上げて、典型的・代表的なケースを学ぶことで一般化して、実生活に充てはめるといふ事例学習をすることも大事である。」という説明があった。

視点3について、「自助」「共助」という用語が理解できていても、シミュレーションをした場合、多くの犠牲者を出した宮城県の児童と同じ行動をとってしまうという児童が大半を占める結果になった。そこを、問い直しの教材として「釜石式防災教育」の内容を投げかけることで、子ども達は既習事項と実生活を結びつけて、再度考えさせた。結果、単元の中心概念に迫ることができた。

【今後の課題】

- ・ 被災時に、家族が絡んだ場合、家族の安否を優先に考える児童が多数見られた。防災教育を家庭に対しても行うことで、被災時にどう行動するか、日頃から話し合うよう啓発する必要がある。
- ・ 学級だけの防災学習では、成果は得られない。社会科での防災学習と学校全体で取り組む防災教育をリンクさせる等、全体的な取り組みが必要である。



川崎で育てる力 ～朝の活動の取組を通して～

三好市立川崎小学校 瀨本 恭代

1 はじめに

本校は、徳島県の西部、祖谷川が吉野川に合流した地点に位置し、豊かな自然に囲まれた所にある。現在全校児童8名、PTA戸数6件であるが、保護者のみならず地域の方々が学校に寄せる期待と信頼は大きく、互いに強い絆で結ばれている。しかし、過疎化が進み、小規模校の統廃合、休校が進む中、我が校にもその波は押し寄せ、今年度末での休校が決定している。



2 研究の目的と方法

本校は、1年は単式学級、3・4年、5・6年は複式学級である。給食当番や特別教室の清掃をはじめ、教育活動のほとんどを学年の枠をこえた異年齢集団活動で進めている。児童は、素直で明るく、8名で力を合わせながら目の前の課題や仕事を一生懸命こなそうとしている。

しかし、少人数であるが故におのずと人間関係が固定化され、遊びや友達同士のかかわり方において偏りが起こりやすいのを感じる。また3学級中2学級が複式学級であり、同級生がいない学年もあるため、学級単位での同級生同士の学び合い、高め合いが困難である。

そこで、少人数であることを最大限に生かす取組、すなわち全校児童による異年齢集団での活動の中で、確かな学力や体力の向上、表現力の育成や道徳性の涵養、人権感覚の育成を図るために、朝の活動の時間を積極的に活用しようと考え取組をすすめてきた。

本校では、毎朝7:50～8:10を「朝の体力作りの時間」、8:10～8:20を水やりなどの「ボランティアタイム」、8:20～8:35を「朝の活動の時間」とし、曜日ごとに活動内容を決め取り組んでいる。

3 実践

(1) 体力向上のために

児童それぞれの課題を把握し、それぞれが目標を達成できるよう、個や学年に応じた目標設定をしている。その時間、基礎体力づくりや、体幹トレーニング、持久走や各大会の練習を行っている。この時間は、全教員がかかわることにより、個々のスキルアップのための支援をすることができる。また、ミニゲームなどにより、集団での遊びやゲームを楽しませることもできる。この20分間の積み重ねが、児童の体力向上に大きくかかわる時間となっている。



(2) 確かな学力の向上のために

毎週火曜日の朝の「ドリルタイム」では、それぞれが目標をもち、課題に取り組んでいる。主に、ドリルやプリント、電卓による百マス計算を行っている。本校の児童の課題として、以前の学年の漢字や数学的な規則を忘れていく傾向にある。また、繰り返し根気よく練習することに抵抗感がある児童もいる。具体的な方策としては、家庭学習チェックシートをもとに、個々の課題を見つけ、絞り、課題を与えるようにしている。学習時間の確保と内容の精選により、集中して取り組めるようになったことで、漢字や計算に対する苦手意識が減り、基礎学力の定着につながっている。



(3) 人権感覚を育てるために

隔週金曜日、「キラリタイム」を実施している。友達のよさや頑張りなどを発表する「友達キラリ」を継続していく中で、発表する内容に広がりや深まりが出てきた。例えば、以前であれば多くの児童が「〇〇さんが、ぼくが運動場に忘れたジャンパーを持ってきてくれました。ありがとう。」と、目の前で起こった出来事そのものを発表するだけであった。しかし、だんだんと「〇〇さんは、朝の体力作りの時、6年生の後を必死でついて走っています。きっと自分も6年生のすばらしいところを真似したいのだと思います。目標をもって頑張る姿がかっこいいなあと思いました。」といった、その時の友達の思いにまで思いを膨らませ、すばらしい所に気づくようになってきた。

また、自分自身のことを振り返って発表する「自分キラリ」でも、自分のことを客観的に見る目が育ちつつある。「ぼくは、6年生としての自覚を持って、下の子達に声をかけたり、率先して動いたりできるように心がけています。」といった、学期が進むにつれて自分の内面の成長に対しても目が向けられるようになってきた。



「子キラリ」では、児童は普段なかなか言えない家族への感謝の気持ちをカードに書き、その裏には保護者に「親キラリ」として、児童の頑張りに対する励ましや賞賛の気持ちを言葉にしてもらっている。児童からの「お母さん、いつもおいしいご飯を作ってくれてありがとう。おかげでぼくは毎日がんばれます。」という思いに対して、保護者からは「〇〇へ 疲れている時、肩を叩いてくれたり、足を踏んでくれてありがとう。あなたはマッサージの名人です。おかげで明日からの仕事がまた頑張れます。」という言葉が届けられた。親子だから当たり前、家族だから当たり前のことかもしれない。しかし、言葉にすることで、児童は家族の思いを知り、「気持ちは伝えてこそわかり合えるもの」だと学ぶ機会になっている。そして、保護者にとっては、当たり前に見えることを言葉にしてほめ育てることが、児童のやる気を育てるのだと気づく機会になっている。



(4) 表現力を育てるために

隔週月曜日、「うぐいす集会」を行い、全校で詩の朗読をしたり、歌を歌ったりしている。まずはじめに、早口ことばなどを使って発音・発声トレーニングを行い、次にさまざまな詩の朗読を行い、いろいろな言葉にふれる機会を作っている。また、既習の歌を歌い、声を出すことの楽しさを感じたり、詩の暗唱や本の朗読、作文の発表など学年発表の時間も設けている。

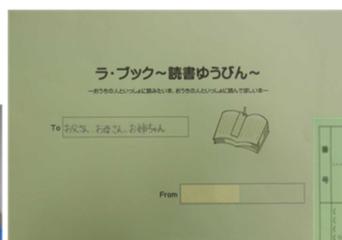


みんなで気持ちを一つにして声を出したり、学習の成果を全校のみんなに発表したりすることで、コミュニケーションのもととなる声の出し方を学ぶとともに、人前で声を出すことへの抵抗感をなくし、自信をつける場となっている。

また、木曜日の朝を「読書タイム」とし、第1・第3木曜日の朝の時間を「おはなし会」、第2・第4木曜日の朝を「ラ・ブック」、第5木曜日を「読書」としている。

「おはなし会」では、児童、教職員が交代で絵本の読み聞かせをしている。また、地域の方にもボランティアで来ていただいている。読み聞かせの後、全員が感想を発表する。一冊の本を通じて、互いの気持ちや考えを伝え合う場として、感想発表の時間は大変有意義なものとなっている。

また、児童自身や、教職員がねらいをもって意図的に選んだ本を持ち帰り、家族で読書を楽しむ親子読書「ラ・ブック」を行っている。できるだけ児童が家族に読み聞かせをすることで、児童の表現力を育み、また本の感想を家族で共有し合うことで、保護者が児童の発達段階や成長を知る機会になっていると考えている。



本の名称	著者の名	読み聞かせをした人 お聴いてくれた人 お聴いてくれた人	自分の感想
作書の名前	著者の名	先生の感想	おうちの人の感想 ※一冊読んでみるものではないけれど、
1 わたしのいもうと 松谷みよ子 著 2017年	2017年	先生の感想 「自分の感想」 「いじめて傷つきました。いじめられた子は死んでしまったので、いじめは本当になくさないといけないなと思いました。」と書かれていた。それを受けて教員は、「Aくんへ 自分を大切にすることと自分だけがよければいいこととは違うよね。いじめの奥底にはそんな違いがあるように思います。Aくんは、川崎ではお兄さんです。みんなの気持ち、それぞれの気持ちを考えられるお兄さんになってきたと感じているよ。」と書いて渡した。そして、保護者の感想には「本当につらくて胸が苦しくなるような気がします。絶対に友達にひどいことを言ったりする人にはなってほしくないです。このことをずっと大人になってもおぼえてほしいです。」と書かれていた。この「ラ・ブック」によって、子ども、家庭、学校がつながり、児童の人権感覚を知り、育む場となっている。	
2 わたしのいもうと 松谷みよ子 著 2017年	2017年	先生の感想 「自分の感想」 「いじめて傷つきました。いじめられた子は死んでしまったので、いじめは本当になくさないといけないなと思いました。」と書かれていた。それを受けて教員は、「Aくんへ 自分を大切にすることと自分だけがよければいいこととは違うよね。いじめの奥底にはそんな違いがあるように思います。Aくんは、川崎ではお兄さんです。みんなの気持ち、それぞれの気持ちを考えられるお兄さんになってきたと感じているよ。」と書いて渡した。そして、保護者の感想には「本当につらくて胸が苦しくなるような気がします。絶対に友達にひどいことを言ったりする人にはなってほしくないです。このことをずっと大人になってもおぼえてほしいです。」と書かれていた。この「ラ・ブック」によって、子ども、家庭、学校がつながり、児童の人権感覚を知り、育む場となっている。	
3 わたしのいもうと 松谷みよ子 著 2017年	2017年	先生の感想 「自分の感想」 「いじめて傷つきました。いじめられた子は死んでしまったので、いじめは本当になくさないといけないなと思いました。」と書かれていた。それを受けて教員は、「Aくんへ 自分を大切にすることと自分だけがよければいいこととは違うよね。いじめの奥底にはそんな違いがあるように思います。Aくんは、川崎ではお兄さんです。みんなの気持ち、それぞれの気持ちを考えられるお兄さんになってきたと感じているよ。」と書いて渡した。そして、保護者の感想には「本当につらくて胸が苦しくなるような気がします。絶対に友達にひどいことを言ったりする人にはなってほしくないです。このことをずっと大人になってもおぼえてほしいです。」と書かれていた。この「ラ・ブック」によって、子ども、家庭、学校がつながり、児童の人権感覚を知り、育む場となっている。	

例えば、松谷みよ子作「わたしのいもうと」という本。児童の感想には「いじめで深く傷つき、いじめた子たちが知らないまま、いじめられた子は死んでしまったので、いじめは本当になくさないといけないなと思いました。」と書かれていた。それを受けて教員は、「Aくんへ 自分を大切にすることと自分だけがよければいいこととは違うよね。いじめの奥底にはそんな違いがあるように思います。Aくんは、川崎ではお兄さんです。みんなの気持ち、それぞれの気持ちを考えられるお兄さんになってきたと感じているよ。」と書いて渡した。そして、保護者の感想には「本当につらくて胸が苦しくなるような気がします。絶対に友達にひどいことを言ったりする人にはなってほしくないです。このことをずっと大人になってもおぼえてほしいです。」と書かれていた。この「ラ・ブック」によって、子ども、家庭、学校がつながり、児童の人権感覚を知り、育む場となっている。

(5) 道徳性の涵養のために

「ボランティアタイム」では、朝の体力づくりの後、学年の分担場所の水やりをそれぞれ行っている。また、毎週水曜日の「屋外清掃」の時間は、運動場や中庭の草とりや落ち葉掃き、花の世話などを行っている。学年が上がるに従って、草を抜く量が増えたり、手際よく仕事ができるようになってきた。そんな高学年の姿を見ながら働く、下学年の児童にも成長の跡が感じられ、草取りや竹ぼうきの使い方もだんだんと上手になってきた。みんなで力を合わせ、黙々と作業をする中で、勤労の精神がしっかりと身につけてきている。



3 おわりに

「続けること」を「続けること」は簡単なことのように感じて難しいことである。しかし、本校の特色は、教職員の共通理解のもと、全ての活動に、全ての教職員がかかわるという、組織力と機動力にある。昨年度の反省を次年度に生かしていこうとするためには、教職員間での共通理解と協力が不可欠である。

継続した取組の中で、児童は力を伸ばし、自信をつけてきている。低学年は高学年の後ろ姿を見ながらそれを手本とし、真似、高学年はその姿に数年前の自分を重ね合わせながら、上級生としての自覚と自信をつけてきている。少人数であることのマイナス面をいかにプラス面に変え、生かしていくか、その工夫がたえず求められている。本校では、朝の活動に異年齢集団を効果的に活用することで、課題解決に取り組んできた。

様々な実践の見直しや改善を行い、継続して進めていく中で、全校での取組が学級の中で生かされ、学級での取組が全校の中で生かされている。そして、このサイクルの中で、自分に自信をもち、自他を大切にできる児童が育ってきている。

本校は、今年度末をもって休校となる。残り3か月、入学してから今日まで、毎日続けた朝の活動の取組を通して培ってきた力に自信をもって、これからの生活に臨んでいける児童を育てていきたいと考えている。

川崎だからこそできる取組の中でつけてきた力を、これからそれぞれにどう生かしていくか。たとえ川崎小学校が休校となっても、自分たちの住む地域や自分たちが学んできた学校を胸張って誇れる子どもたちであり続けてほしいと願っている。ここで培ってきた力が、これから大きな集団へと巣立っていく、たくさんの人と出会っていく子どもたちの、心の支えになると信じている。



研究主題

自分のよさや可能性に気づき、主体的に取り組む児童の育成を目指して —人や自然とのかかわりを通して—

下名小学校 教諭 喜多芳恵

1 はじめに

本校は、吉野川や山々に囲まれた豊かな自然と観光地としてのにぎやかさを併せ持つ場所にある。児童は自然に親しみながら、のびのびと過ごしており、明るく素直で何事にも一生懸命に取り組む。また、保護者や地域の教育への関心は高く、学校に対して大変協力的である。豊かな自然や地域とのかかわりを深めながら地域に根ざした教育活動を進めていくことは、本校にとって大変意義のある重要なことと考える。

そこで、担任する1年生を中心に、自然や地域の人と関わりを通して、自分のよさや可能性に気づき、主体的に物事に取り組む態度を育てたいと考えた。

2 研究の目的

身の周りの人や自然とのかかわりを通して、自分のよさや可能性に気づき、主体的に物事に取り組む児童の育成をめざす。

3 実践

(1) アサガオの観察をしよう

4月末にアサガオの種をまき、観察を続けていった。双葉が出たころ、本葉が出たころ、つるがのび出したころ、つぼみがつき出したころ、花が咲き出したころの、5つの時期に観察をする時間をとった。観察の流れとしては、①一人で観察する、②気付いたことを発表する、③友達の発表から自分が気付いていなかった部分を確認する、④観察日記にまとめる、という流れをとった。

児童は、はじめこそ「葉が出た。」「大きくなった。」というだけであったが、細かく観察を続けていくうちに、葉の数や形、色など、様々なところに目を向けるようになった。また、始めは水遣りを忘れがちだったが、「アサガオも水がなかったらからからになってしまう。」「きれいな花が咲いてほしいから、水をあげよう。」と言って、アサガオがかれることのないように毎朝欠かさず水をやり、花が咲いたときには大変うれしそうに報告をしてきた。アサガオの世話を主体的にしていくことで、自然の細かい変化にも気付くようになり、自然を大切にする心情も育ってきた。

(2) シャボン玉名人になろう

児童にとって、シャボン玉は身近にあるもので簡単に作ることでできる親しみやすいものである。そのシャボン玉をいろいろな視点から調べてみることにした。

まずシャボン玉遊びを楽しんだ後、シャボン玉について調べてみたいことを話し合わせた。はじめは、なかなかイメージが膨らまない児童も、友達の発表を聞いていくうちに、自分が試してみたいものを考え出すことができた。

調べることを決め、実際にどうなるのか実験をしてみた。大きなシャボン玉を作るのに適したものを考えたり、割れにくくする方法を考えたり、情報交換をし合うことで気付きの質が高まり、話し合いを通して友達のよいところを見つけ、共有することができた。

(3) 楽生会との交流

楽生会（地域の老人会）の方々は、年に1回、学校にきてものづくりの楽しさを教えてくださる。1年生にとっては初めての交流会であり、楽生会の方と会うのも初めてであったため、楽しみにしている児童がいる一方、うまく話ができるか不安に思う児童もいた。今年度は、1～6年生の縦割り4班に分かれて突き鉄砲を作った。竹を切ったり、長さや太さを調整したりするのが1年生には難しく、始めはやり方がわからずにいた児童に、「教えてください。」と話しかけるように促した。楽生会の方が優しく教えてくれると、安心したのか次からは自分で質問をするようになった。中には、のこぎりを使って竹を切ることに挑戦した児童もいた。

交流会が終わった後には、「ものづくりは楽しい。」「竹で鉄砲が作れるなんてすごい。」「竹を切るのは初めてだったけれど、自分でできた。」といった達成感を味わった感想があがっていた。



(4) 秋のフェスティバル

秋のフェスティバルは、楽生会の方や地域の方、保護者に感謝の気持ちを表し、一緒にゲームや出し物を楽しむことを目的としている行事である。

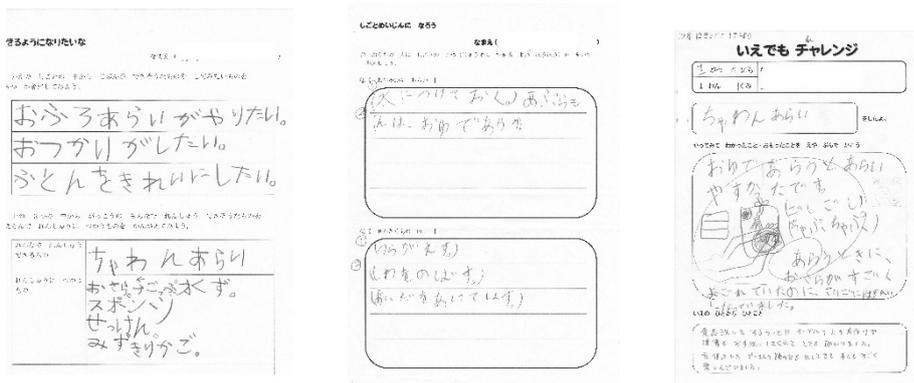
1年生にも、突き鉄砲の作り方を教えてくれたお礼として、楽生会の方に楽しんでもらえるように出し物を考えることをめあてとして説明した。出し物を考える際に、「自分達が行いたいこと」への意識が強い児童がいたが、「お客さんのためにする」という目的を理解した児童の働きかけで、簡単でわかりやすいゲームとして「ゴルフ」と「箱の中身あてゲーム」に決まった。そして、準備段階で、どうしたらみんなが楽しめるゲームになるのかということ問いかけ、めあてを意識させた。すると、児童の側から「これならみんな楽しめるね。」「失敗しても大丈夫。」という声上がり、準備をするようになった。ある程度準備ができた時点で、店役と客役に分かれて、互いのゲームを確認しあった。それぞれの修正点を出し合い、協力しながらみんなが楽しめるものが完成した。

当日は、お客様と笑顔でかかわり、たくさんの人に「楽しかった。」「また来る。」と言ってもらえた。終了後の児童からは、「たくさんのお客さんが楽しんでくれたので、がんばってよかった。」「自分がすることをきちんとできた。」「自分も楽しかった。来年もがんばりたい。」といった感想が聞かれた。

児童一人一人が、多くの人とのかかわりの中で生きていることを実感し、感謝の気持ちを表すことの心地よさを体得するとともに、知恵を出し合い、協力しながら物事を成し遂げることの大切さを学んだ。

(5) 仕事名人になろう

冬休みも間近に迫った 11 月下旬、生活科の学習で家の仕事について調べた。それをもとに、家族一人一人に家庭での役割があり、分担・協力しながら自分たちの生活が成り立っていることを理解させた。そして、家族の一員として自分のできることを探し、家庭でも自主的に何かに取り組む場を設定しようと考えた。児童からは「茶碗洗い」「洗濯物干し」の仕事をしてみたいという意見が出た。家の人に「茶碗洗い」「洗濯物干し」のコツを教えてもらい、どうすれば上手にできるのかを報告し合い、実際に授業で練習をした。そして、家庭での実践を通して、児童は、「茶碗洗いは水が冷たくて大変。」と家族の苦労を知ったり、「洗濯物を干すときはしわをきちんと伸ばす。」など仕事のコツを教えてもらったりしながら、「最後にはきちんとできた。」と達成感を味わうことができた。家族から、「上手にできたね。」「手伝ってくれて助かったよ。」と褒めてもらえたことで、自分にできることを増やそうという意識や、冬休みにも継続してお手伝いをしようという意欲が高まった。



4 おわりに

小規模校であるため、地域の教育力は、児童の成長に欠かせないものである。人や自然とのかかわりを通して、いろいろな刺激を受け、児童は周りの人や自然の大切さを感じ取り、感謝の念をもつことができた。また、自分のよさや可能性にも随所で気付いた。そして「何事もやってみないとわからない」といった挑戦する気持ちをもち、進んで取り組もうとする主体性も徐々に身につくにつれてある。

今後は、支えてくれる人への感謝の気持ちをもち続け、人や自然とのかかわりを大切にしながら、さらに主体的に物事に取り組むようにしていく。そして、人や自然とのかかわりの中で、それぞれの考えや感じ方があることに気付き、自分も他の人も大切にしようとする態度の育成につなげ、今後の教育活動を深めていきたいと思う。

「生きる力を培う学校行事（オリエンテーリング）」

～自分・地域再発見～

三加茂中学校 教諭 佐藤 篤史

1 はじめに

東みよし町は、平成18年に三好町・三加茂町が合併して誕生した。徳島県の西北部に位置するこの地域は、四国三郎の異名をもつ吉野川が流れ、豊かな水と緑に囲まれた場所となっている。また、国道192号線、JR徳島線、徳島自動車道が町の中心を走り、人や物の交流連携の拠点として、発展が期待されている。

校区は、国道沿いに商業施設や飲食店が立ち並び、過疎化が進む徳島県西部においても、活気のある地域である。三加茂中学校は、昭和36年に三庄中学校・加茂中学校が統合して創立され、平成13年に現在の校舎に、新築移転した。学校の校訓は「創造」で、教育目標は「一人ひとりの自主性・社会性・創造性を発展させるとともに、人権を尊重し、個性の伸長と豊かな人間性の育成に努める」ことである。全校生徒は248名で、学級数は11学級で構成されている。加茂小学校と三庄小学校の2つの小学校から入学してくる生徒達は、明るく活発であり、意欲的に学校行事や部活動に取り組んでいる。

2 研究の目的

- (1)自然に親しみ、心身を鍛える。
- (2)グループでの活動を通して人間関係を深め、協力し合う態度を養う。
- (3)郷土を巡ることにより、郷土愛を育てる。
- (4)行動力、判断力、推理力、決断力を養う。

3 研究の方法と実践

本校では、3つのオリエンテーリングコース（約15km）を設けている。三庄・絵堂・加茂コースの順に毎年11月に実施し、生徒たちが卒業するまでの3年間ですべてのコースを回れるようにしている。スコアオリエンテーリングとし、地図上に示されたポストをまわり、制限時間内にできるだけ多くの得点を集め、その合計点を競い合うしくみである。生徒たちは、さまざまな問題を解きながら、自分や友人の住んでいる地域を自分の足で歩くことになる。また、普段はなかなか触れることのない地域の自然や文化に直接目にするにもなる。この体験を通して生徒たちに、自分が育てられた地域の良さを再発見させ、仲間との団結力を高め、協力し助け合うことと、最後まであきらめずやり遂げることの大切さを再認識させることをねらいとしている。

<生徒のうごき>

- ①1年生（3クラス）をクラスごとに5班、2年生（3クラス）をクラスごとに6班、3年生（3クラス）をクラスごとに5班、特別支援学級を1班の計49班に分け、各班で地図を見ながらコースを歩く。（各班の人数は5～6名で男女混合）
- ②9時30分に各学年3班ずつ出発し、その後1分おきに次の班が出発する。

- ③チェックポイントでは、そこにある問題を解き、自ら確認印を持参しているカードに押す。
- ④昼食場所（皇子神社・加茂農村公園）は指定されており、昼食時間は30分以上である。到着・出発ともに教師の確認を受ける。
- ⑤出発から5時間以内に学校到着を目指す。

<教師のうごき>

- ①コースの下見を行い安全確認し、各ポイントを設定し問題を作成する。史跡に関するものは、社会科教員が作成し、それ以外は多様な問題作成を、各教職員にお願いした。
- ②学校・各ポイント・昼食場所に分かれ、生徒の通過を確認し連絡調整を行なう。パトロール隊（3台）で、進行状況を確認した。昼食ポイントである皇子神社では「宝さがしカード」を用意し、生徒がカード見つけると各班ボーナスポイントとして加算されるようにした。
- ③設定時間（5時間）を設け、超過1分ごとに5点減点とした。各問題の得点と、通過ポイントの得点を合計し表彰する。総合優勝1班、各学年クラス別獲得点数で優勝1班、俳句優秀賞・優良賞1作品ずつを表彰した。

<得点方法>

①地図上に示された円内にポストがある。そのポストにつり下げられているスタンプをスコアカードに押すことで距離点（遠いほど高得点）が得られる。また、各ポストの問題に答えて、正解の場合は課題点が得られる。以下は問題例である。

- (1) この大楠の根回りの長さは約何mか？①約10m ②約15m ③約20m ④約25m
- (2) この石碑は、昔鬼門よけのまじないにつくられた。そのため鬼門の方向を向いているが、その方向はどちらか？8方位で示せ。
- (3) 三三大橋が開通したのは何年？①1985年 ②1990年 ③1995年 ④2000年
- (4) What is the date today? ①Tuesday ②October ③Thursday ④October thirtieth
- (5) テニスの2014年全米オープンで準優勝した錦織圭選手のコーチは誰でしょう。
①アグネス・チャン ②マイケル・チャン ③パトリック・チャン ④チャン・グンソク

- ②宝探しポイント
- ③俳句・川柳ポイント



問題はこのような掲示

<反則行為(ペナルティカード1枚没収。1枚につき50点減点。)>

- ・指定場所以外の国道や踏切、役場内の横断した場合。
- ・交通の妨げになる場合(交通ルールを守らない)。
- ・先頭と後尾の差が20mを越えた場合(班行動ができていない)。
- ・複数班で行動した場合。
- ・班行動に参加しない等、非協力的なものがいた場合。
- ・公共物、農作物へのいたずら等、神社・寺等の鐘をついた場合。
- ・競技中歩きながらの飲食行為（水筒・ペットボトルの飲み物に限り、休憩をとれば可）
- ・その他、公衆道徳に反すると認められた場合。

<失格行為>

- ・競技に不必要なものを持っていた場合(お菓子、ゲームなど)。
- ・ペナルティカードが5枚なくなったとき。 >
- ・班行動に不参加者がいる場合で、悪質な場合。
- ・チェックポイントへひとつも行かなかった場合。

ペナルティカード	
R	班 No 1
反則内容	教師氏名

各班に5枚渡された

- ・自転車を使用，自動車などに乗せてもらった場合。
- ・ポストにいたずらをするなど，競技の進行を妨げた場合。
- ・その他，競技を中止すべきと判断された場合(携帯電話の使用など)。

4 結果と考察

本年度は「加茂コース」で開催した。天候に恵まれ，すべての班が無事学校に到着できた。各クラスでは，学年・学級通信や学級の掲示を工夫しその成果をまとめてくれている。以下は実施後の生徒の感想である。

今年は加茂方面だったので，なじみがあり，小学生の頃に通っていた道なども通り，すごくなつかしかったです。1・2年生の頃は山道が多くてすごくしんどかったけど，今日はそれほど山道がなかったので，これまでより楽しく歩くことができました。難しい問題もありましたが，近くを散歩していたおじいちゃんやおばあちゃんに質問すると，とても快く答えてくれて嬉しかったです。

お昼ご飯を皇子神社で食べて，次のポイントに行こうと思って歩いていると，気がつけば遭難していました。暗くて細い道に入ったり，やけに曲がる道が多いなあと思いつつも，班の人たちと話しながら歩いていると，何とか脱出できました。「三加茂にはこんな所もあったのか」と初めて知った場所がたくさんありました。最も印象に残っているのは，山の上から見る景色です。たくさんの家も吉野川もとても小さくて，私たちの住む町がとても美しく見えました。最後は少し走ってしんどかったけど，良い思い出になりました。

これ以外にも，来年を楽しみにする生徒や，訪れたことのない場所を巡った感動を述べた感想も見られ，一定の成果を得られたと感じる。運営に関しては，班ごとに燃えるゴミ・燃えないゴミの袋を持たせていたが，タイヤやコーン等のゴミを持って歩く生徒がいた。収集するゴミの種類を再考する必要がある。また，反則行為が5件あった。悪質なものではないが，危険につながりかねないので，生徒には事前に違反行為を予防する指導を入念に行っておかなければならないと感じた。

学校行事のなかで，生徒会が企画運営し生徒たちによる文化祭(三加茂中祭)が最も好評である。しかし，教師主導ではあるが，たくさんのメリットを含んだオリエンテーリングは，卒業前の3年生に聞くと，中学3年間で最も思い出に残る学校行事の1つになっている。三加茂中学校だからでき，ふるさとを友と歩きつくる物語は生徒の心の中に深く残っていつているように思われる。今後も生徒たちと共に成功させたいと考える。



皇子神社①



皇子神社②



加茂農村公園



渡船場



町の様子



ゴールはみんなでジャンプ

研究主題

人権問題を解決する実践的な行動力を身につける取り組み
～インターネットと人権の学習を通して～

井川中学校教諭 伊藤憲志

1 はじめに

本校2年生の生徒たちは明るく素直で、けじめのある行動をとることができる。総合的な学習の時間の調べ学習では、コンピュータを利用して学習する機会が多い。修学旅行の事前学習や事後のまとめ学習でも、様々なソフトを利用して学習している。情報モラル実態調査の結果を見ると、本校は家庭でもインターネットを日常的に利用している生徒がたくさんいる。スマートフォンやゲームなどの利用について、平日・休日ともに長く、特に休日に至っては、2時間以上の利用者が平日の2倍になっている。また携帯電話・スマートフォン（所持率52.8%）、携帯型音楽プレイヤーの所持率も高く、ソーシャル・ネットワーキング・サービス（メールや無料通信アプリ、オンラインゲーム等）などについてもかなりの生徒が詳しい知識を持っている。しかし、友達同士の会話や携帯電話の使用の中で、人権について配慮できていない言動があり、トラブルが生じた。安易に個人情報を伝えてしまったり、チェーンメールの処理に不安を感じたりした生徒たちがいた。ゲーム機や携帯型音楽プレイヤーでもネットに接続できたり、無料通信アプリが利用できたりすることを知らない保護者や教師も多く、生徒たちを取り巻く環境は危険が多い。インターネットにおいても社会と同様にルールとマナーがあり、人権に配慮するとともに自分の発言に責任を持つこと、嫌がらせや自己中心的な言動、嘘等は絶対にしてはならないことを理解させたい。また犯罪行為は処罰されたり、賠償責任が生じたりすることを知らせたい。

この学習を通して、インターネットによるさまざまな人権問題について考えさせ、良識あるインターネットの使い方を学ぶとともに、その対応について考えさせていきたい。人権に配慮することは、すべての人や場面が必要なことである。互いの顔が見える普段の生活の中でも、顔の見えないインターネット上でもそれは全く変わらない。人権を大切にすることというのは、みんなが幸せに生きていくために、自分と同じように他人も大切にすることである。すべての命を大切に、輝いて生きていく人になってほしい。誰もが明るくのびのびと、安心して自分の夢に向かって取り組むことができる学級にするために、いじめなどの人権侵害を許さない鋭い人権感覚を持つ集団にしたい。生徒たちとともに人権について学習していくことが、毎日のクラスの人間関係を温かいものに変えていくことにつながっていく。本校2年生が互いの人権を尊重し、人権侵害を許さない、友達の心の痛みに寄り添えるぬくもりにあふれる学年集団になることを願い、研究に取り組んだ。

2 研究の目的

文部科学省から公表された「人権教育の指導方法等の在り方について〔第三次とりまとめ〕」では、人権教育を通じて育てたい資質・能力を知識的側面、価値的・態度的側面、技能的側面の三つの側面として捉えている。本校では生徒が人権問題を解決しようとする実践的な行動力を身につけることができる取り組みについて考えてきた。2年生では生徒指導上でもそのトラブルが問題視されている、インターネット上での人権侵害について学習することにした。人権

侵害の被害者・加害者にならないための知識を身につけさせ、人権侵害を許さない人権感覚と態度を育てることを目的として学習をスタートさせた。

3 研究の方法と実践

指導計画

(1) DVD「春野家ケータイ物語」(NHKエデュケーショナル)

(2) あなたならどうする!?

「自分の名前で掲示板にウソを書かれたAさん」(わたしの願い)

(3) 「あなたならどうしますか」(わたしの願い)

(4) ラインの会話を作ってみよう (三好郡・三好市中学校人権教育研究大会で公開授業)

① 研究大会当日の発問

ラインをしていると、「〇〇、最近うざくない?」と言ってきた友達があります。言ってきた友達も、中傷された友達もあなたと仲のよい友達です。あなたはどう返信しますか。

② グループ学習

返信の仕方によっては、相手を怒らせたり、孤立させたりしてしまう。そうならないようにどうしたらよいかグループで考えて、会話を作る。

(生徒の意見より)

メールやラインは文字だけのコミュニケーションなので、受け取る側に細かいニュアンスが伝わりにくいので、正確に気持ちを伝える工夫をする。

③ ロールプレイング

自分たちのグループはどんな会話を作ったか発表する。

工夫したところ、苦労したところ、うまくできたと思うせりふなどを発表する。

④ ロールプレイングについて意見交換する。

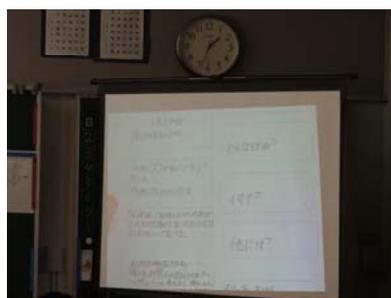
中傷した友達に人権の大切さを上手に伝えることができた部分、中傷された友達に寄り添い支えることができていた部分、または改善点などを見つけて話し合う。

⑤ 人権侵害のない社会を作るために、自分はどうか考える。

(5) 評価

- ・ インターネット上の人権侵害について理解し、その対応について正しい知識が身に付いたか。(知識的側面)
- ・ 自分の問題として真面目に取り組むことができたか。(価値的・態度的側面)
- ・ 人権の大切さを理解し、情報を正しく選択する力やロールプレイングで身に付けたコミュニケーションの能力をこれからの生活に生かしていく実践力が身に付いたか。

(技能的側面)



(6) その他の取り組みと生徒の感想

① 携帯電話安全教室

スマホは安全に使えば楽しく便利な機械ですが、一歩間違えばとても危険なものです。SNSなどに写真を載せると名前や場所など個人が特定され、LINEやメールは気持ちが悪く伝わらず相手を怒らせる場合もあります。ぼくは「この文を送ってもいいか」を考えたいと思います。この日本でスマホや携帯がとても安全で、みんなが安心して使えることをぼくは願っています。



② 性教育講演会

性教育講演会で助産師さんの話を聞き、赤ちゃんのことや性について学ぶことは大切だと思いました。出産の時に母さんの頑張りと周りの人たちの励ましがあつたからこそ、今の自分がいるのだと思うと、私に命を与えてくれた両親とたくさんの人たちに感謝したいと思います。これからも自分や周りの人たちの命を大切にして、自分らしく生きていきたいです。



③ ふれあい体験学習

最初は抱っこやあやすのが上手くできるか不安で、ドキドキしました。でも、赤ちゃんは温かく、予想よりも重かったし、赤ちゃんの笑顔にはとても癒やされました。抱っこすると命の大切さを感じ、母親がどういう気持ちで子育てをするのかわかった気がしました。私も将来立派な大人になって、結婚して子どもを産んだら、ふれあい体験で学んだことを生かしたいです。



4 結果（生徒の感想より）

ラインでの悪口はどう返信するかは、とても難しかったです。自分の友達という設定だったので、悪口を書き込んだ理由を聞くようにしたけど、そんなに仲がよくない子の場合でも理由を聞くべきだなと思いました。トラブルに関わりたくない、めんどくさい、私には関係ないという気持ちは誰にでもありますが、きちんと友達に向かい合って話をすれば、必ずわかってくれるし、そのときに得る喜びはとても大きいだろうと思います。「この子が友達でよかった」と思われる人になりたいです。また5班・6班の発表を聞いていると、1人より2人の方が心強くいられるということがわかりました。私たちもきちんと心のつながったクラスにしたいです。日常生活の中で自分の友達が「あんな子、もう友達でない！」などと言ったら、穏やかに「それはダメだよ」と言える人になろうと思いました。自分もささいなことで人の悪口を言ったり書いたりしないようにします。

友人が問題を抱えているとき、自分には関係ないと放っておくと何一つ良くはならないということを学びました。どんなに怒っている人とも勇気を出して話し合っていたいし、周りをよく見て発言し、相手の話をきちんと聞こうと思いました。そうすることで人から頼りにされ、「この人に相談して良かった」と思われる人になれると思うからです。そんな人になれるよう、何事にも全力で取り組みたいと思います。

この授業でインターネットについて具体的に詳しく学ぶことが出来て良かったです。メールでの対応を学んだので、もし友達が不満などを送ってきたら、相手の気持ちを考え、孤立させないようにしながら解決していきたいです。また、その後で「これからはそんなことを書き込んだらいけないよ」と注意したいです。善悪の判断をきちんとし、今回の授業で学んだことをこれからの生活に生かしていきたいと思います。

5 おわりに

子ども達は人権学習を通して、自分の生き方を見つめ直し、仲間の大切さを実感し、ともに考え、よりよい行動を実践しようとする姿勢が見られるようになった。携帯電話安全教室ではさらに理解を深めることができた。また並行して「ふれあい体験学習」を行ったこともよりよい方向に働き、自分の命をはぐくんでくれた人たちに感謝し、他者の命も大切にしたいという気持ちが育ってきたように見える。二学期末に行われた生活アンケートでは、「学級は楽しい雰囲気ですか。」という問いに対して、全員が「楽しい」、「まあまあ楽しい」と答えていた。しかし「あなたは、友達が間違った行動をしているときに、間違いだと指摘することができますか。」という問いに対しては、半分の生徒が「わからない」と回答した。さらに信頼の絆で結ばれた仲間作りを推進していく必要がある。これからも差別解消に向けた実践力を持った生徒の育成を目指し、生徒とともに努力していきたい。



平成26年度の事業報告

1 研究主題

「未来を切り拓き、心豊かにたくましく生きる子どもの育成」

2 事業

(1) 調査研究関係

- ア 教育課程の研究とそれを踏まえた学級経営のあり方
- イ 複式の特性を生かした学習指導方法の研究
- ウ 情報教育についての研究
- エ 生徒指導にかかわる諸問題の調査研究
- オ 県内外の各研究所の研究内容の紹介
- カ 各種研究会への参加と研究物収集
- キ 購入図書・DVD等の紹介

(2) 研究会等の開催・共催

- ア 研究推進協議会・運営委員会（研究課題についての研究協議）
第1回 6月10日（火） 第2回 2月23日（月）

イ 情報教育研究会（情報教育部会と共催）

◎夏季研修会

8月28日（木） 於：東みよし町中央公民館
参加者54名 参加企業16社

〈内容〉

○セッション

- ・「模擬授業」 吉岡七奈子 教諭（足代小）
- ・「教材ワークショップ」 土井 国春 教諭（足代小）
- ・「産官学の連携」 全参加企業
- ・「デジタル教科書」 森本 誠司 教諭（池田小）
- ・「教材ワークショップ」 高橋あゆみ ICT支援員

○実践発表

発表者	齋藤 剛	教諭（三庄小）	上浦 大輔	教諭（東祖谷小）
	横川 由佳	教諭（昼間小）	東 武志	教諭（高志小）
	邊見 瑞穂	教諭（加茂小）	曾我部悦嗣	教諭（三庄小）
	小原 敏二	教諭（芝生小）	山口 恭史	教諭（昼間小）

◎コンピュータ作品コンクール関係

10月21日（火）コンピュータ作品審査会（三好教育センター）
11月1日（土）～2日（日）東みよし町祭りで展示
11月22日（土）～24日（月）三好市民文化祭で展示

ウ 複式教育研究（へき地・複式部会と共催）

- ◎夏季研修会 7月30日（水） 於：吾橋小学校 参加者23名
 - ・「加羅宇多姫伝説」DVD視聴
 - ・そば打ち体験・試食

- エ 人権教育研究会（三好郡市学校人権教育研究大会）
 11月12日（水）就学前・小学校分科会（於：昼間小学校）
 11月7日（金）中学校分科会（於：井川中学校）
 11月20日（木）高等学校・特別支援学校分科会（於：池田支援学校）

- オ 新任管理職研修
 4月21日（月） 於：三好教育センター 参加者8名
 ・「学校事務について」 三好市事務グループ

- カ 助教諭学習会（徳公教組と共催）
 4月26日（土） 6月11日（水）・18日（水）
 於：三好教育センター
 ・「論文対策講座」 倉本 淳一 教育長（三好市）
 ・「教育法規についてⅠ・Ⅱ」 赤堀 誠司 研究員
 井川 秀樹 研究員

- キ 教頭・中堅教員勉強会（学校運営研修）
 6月25日（水）・27日（金） 7月4日（金）・11日（金）
 7月31日（水） 8月2日（土）
 於：三好教育センター 参加者10～18名
 ・講義① 小谷 千恵 事務室長（池田中）
 ・講義②・③ 倉本 淳一 教育長（三好市）
 ・講義④ 向井 敬治 校長（東祖谷中）
 ・論文ワークショップ①・② 教頭部会 藤本 慎二 校長（芝生小）
 教諭部会 天竹 勉 校長（加茂小）

※オ～キ「三好教育振興協議会」との連携による事業

(3) 各種研究の委嘱

- ア 研究発表校
 井内小学校 三加茂中学校 三好教育研究所

- イ 研究協力校（27年度発表）
 箸蔵小学校 三野中学校

- ウ 委嘱研究員
- | | | | |
|--------------|-------|-------|----|
| ・幼稚園（第1ブロック） | 三庄幼稚園 | 田岡 明美 | 教諭 |
| ・小学校 1区 昼間小 | 大西三千代 | | 教諭 |
| 2区 玉地小 | 木村 栄治 | | 教諭 |
| 3区 川崎小 | 濱本 恭代 | | 教諭 |
| 4区 下名小 | 喜多 芳恵 | | 教諭 |
| ・中学校 1区 三加茂中 | 佐藤 篤史 | | 教諭 |
| 2区 井川中 | 伊藤 憲志 | | 教諭 |

(4) 各研究会・団体等との協力

- ア 三好教育会

- イ 三好郡・三好市小教研，三好郡・三好市中教研
- ウ 三好郡・三好市学校人権教育研究協議会
- エ 三好郡・三好市各幼稚園，小学校，中学校
- オ その他教育関係諸機関

(5) 研究調査資料の整備と紹介

- ア 教育図書，各種研究大会研究物，各種研究所刊行物の収集整備
- イ 視聴覚情報機器・教材の購入と紹介

(6) 三好地域教育史編集のための資料保存

(7) 三好教育振興協議会の事務局業務

(8) 研究成果の発表及びその普及

ア 三好教育研究発表会

- 日 時 平成26年8月21日(木) 12:15～16:40
- 会 場 三好市池田総合体育館 サブアリーナ
- 参加人数 三好市・三好郡内教職員 280名
教育研究所・三好教育会 5名
来賓・その他 9名

○研究発表

- ・家庭や地域と手を取り合っ心豊かな子どもをはぐくむ教育活動の実践
～多くの人々とふれ合う体験的な活動や学校行事を通して～
井内小学校 発表者 住田 克弘 教頭
- ・豊かな心と，自ら学ぶ力を育てる中学校教育の創造
～学校図書館教育を中心として～
三加茂中学校 発表者 山下ちづる 教諭
- ・三好地区の学校における ICT 活用の現状と課題について
三好教育研究所 発表者 岡本 博一 教諭
(現 東祖谷中学校 教諭)

○講 演

- 演 題 「小・中学校におけるインターネット利用の実態と
学校での指導の在り方について」
- 講 師 教育情報化コーディネーター 大笹 いづみ 氏

イ 研究所報(第95号)と研究紀要(第55集)の発刊

- ◆ 各学校にCDにて配布
- ◆ 各研究機関にCD等の送付

ウ 研究員による研究報告(27年3月)

エ ホームページ等による広報活動

歴代委嘱研究員一覧(平成元年～) 幼稚園・小学校

年度	幼稚園	小学校				
	幼稚園	小学校1区	小学校2区	小学校3区	小学校4区	小学校5区
元	国見マチ子(絵堂幼) 斎藤光子(三野幼)	藤本政義(王地小) 坂野町子(三庄小)	天竹勉(昼間小) 前川順子(辻小)	吉岡弘恵(池田小) 久保徹(箸蔵小)	森勝正(河内小) 小笠健二(大野小)	森本義博(櫟生小) 和田初枝(落合小)
2	国見マチ子(絵堂幼) 斎藤光子(三野幼)	藤本政義(王地小) 坂野町子(三庄小)	天竹勉(昼間小) 前川順子(辻小)	吉岡弘恵(池田小) 久保徹(箸蔵小)	森勝正(河内小) 小笠健二(大野小)	森本義博(櫟生小) 和田初枝(落合小)
3	山口悦子(増川幼) 横田嘉代子(昼間幼)	小笠松美(王地小) 大瀧和彦(加茂小)	藤野圭一(足代小) 為実敬子(西井川小)	武内隆史(出合小) 真鍋宏実(馬場小)	竹野啓治(大和小) 篠原聡(下名小)	細川文男(櫟生小) 松村直也(和田小)
4	佐々木隆子(東山幼) 井上淳子(足代幼)	大瀧和彦(加茂小) 小笠松美(王地小)	為実敬子(西井川小) 藤野圭一(足代小)	武内隆史(出合小) 真鍋宏実(馬場小)	竹野啓治(大和小) 篠原聡(下名小)	松村直也(和田小) 細川文男(櫟生小)
5	岡久尚子(白地幼) 矢野聡子(出合幼)	辻宏明(芝生小) 田岡茂樹(加茂小)	中川糸子(足代小) 齋藤孝(西井川小)	坂本武彦(白地小) 伊丹賢治(三縄小)	田中敬子(上名小) 志磨昭子(大和小)	谷恒二(吾橋小) 大塚一志(栃之瀬小)
6	岡久尚子(白地幼) 矢野聡子(出合幼)	辻宏明(芝生小) 田岡茂樹(加茂小)	中川糸子(足代小) 齋藤孝(西井川小)	坂本武彦(白地小) 伊丹賢治(三縄小)	志磨昭子(大和小) 田中敬子(上名小)	大瀧和彦(吾橋小) 大塚一志(栃之瀬小)
7	大久保珠美(池田幼) 國金砂恵子(野呂内幼)	松田徳子(王地小) 中川斉史(三庄小)	真鍋宏実(昼間小) 土井清子(井内小)	中川法子(池田小) 川人成子(三縄小)	井後辰哉(政友小) 峯川郁代(山城小)	濱口久弥(吾橋小) 森本誠司(落合小)
8	國金砂恵子(川崎幼) 大久保珠美(池田幼)	松田徳子(王地小) 中川斉史(三庄小)	真鍋宏実(昼間小) 土井清子(井内小)	中川法子(池田小) 川人成子(三縄小)	井後辰哉(政友小) 峯川郁代(山城小)	濱口久弥(吾橋小) 森本誠司(落合小)
9	岡尾千恵(下名幼)	原敏二(三庄小)	中川貴史(昼間小)	篠原晃代(馬路小)	小笠原誠(平野小)	徳善之浩(名頃小)
10	木村恵美子(西岡幼)	野町孝英(芝生小)	石井文子(辻小)	島田晴代(野呂内小)	篠原義正(河内小)	岩崎順子(善徳小)
11	三木香代(西庄幼)	森北直樹(加茂小)	中村瑞穂(足代小)	山下史記(佐野小)	河野通之(大野小)	向井ひろみ(菅生小)
12	渡辺千枝(三野幼)	平田公彦(太刀野山小)	小角昌美(西井川小)	三好美智代(西山小)	谷口政代(下名小)	品川知美(櫟生小)
13	岡本久美(西井川幼)	三橋洋子(西庄小)	今川仁史(東山小)	生藤元(箸蔵小)	三橋泰(落合小)	
14	大西恒子(井内幼)	喜多とよみ(王地小)	細谷加代子(井内小)	近藤直美(池田小)	瀧下光子(西宇小)	
15	山中あけみ(箸蔵幼)	樋口隆則(絵堂小)	加藤公夫(昼間小)	近藤明美(三縄小)	松浦理恵(善徳小)	
16	新居利枝(馬路幼)	松代容子(芝生小)	福田ミカ(辻小)	松下寛興(白地小)	井上清隆(栃之瀬小)	
17	古井智恵子(善徳幼)	武田淳子(三庄小)	佐藤仁美(足代小)	向井ひろみ(馬路小)	山中祐二(大野小)	
18	谷本紀子(大野幼)	平尾佐知子(加茂小)	北川ひとみ(王地小)	渡邊真弓(川崎小)	岡本悟(櫟生小)	
19	佐藤重美(東山幼)	平野貴志(東山小)	豊田昌弘(西井川小)	木内晃(佐野小)	猪子研司(和田小)	
20	鳥首こずえ(加茂幼)	邊見明美(絵堂小)	井原理恵(芝生小)	宮本真吾(西山小)	河野恵子(山城小)	
21	大西照子(西井川幼)	和田光司(西庄小)	小角昌美(井内小)	中妻稔子(箸蔵小)	森祐大(吾橋小)	
22	釈子育香(井内幼)	森幸子(昼間小)	松本珠実(王地小)	永山睦子(池田小)	清重正俊(栃之瀬小)	
23	城尾春菜(池田幼)	小角聡志(加茂小)	平尾昌彦(辻小)	安藤久子(三縄小)	平岡千佳(政友小)	
24	元木真砂代(池田幼)	近藤博美(三庄小)	園尾淑子(芝生小)	神谷美樹(白地小)	岩崎真人(櫟生小)	
25	石井やよい(昼間幼)	大久保智江(足代小)	中瀧由紀(井内小)	石丸美穂(馬路小)	福田浩司(東祖谷小)	
26	田岡あけみ(三庄幼)	大西三千代(昼間小)	木村栄治(王地小)	濱本恭代(川崎小)	喜多芳恵(下名小)	

歴代委嘱研究員一覧(平成元年～)

中学校

年度	中 学 校				
	中学校1区	中学校2区	中学校3区	中学校4区	中学校5区
元	坂部栄子(三野中)	頭師正明(井川中)	小島治子(池田一中)	大畑知(大野中)	住友恵子(西祖谷中)
2	坂部栄子(三野中)	頭師正明(井川中)	小島治子(池田一中)	大畑知(大野中)	住友恵子(西祖谷中)
3	新居克佳(三加茂中)	嵯峨久明(三好中)	西岡ひとみ(池田中)	佐藤英一郎(山城中)	島本富美子(東祖谷中)
4	新居克佳(三加茂中)	嵯峨久明(三好中)	西岡ひとみ(池田中)	佐藤英一郎(山城中)	玉木富美子(東祖谷中)
5	尾関英知(三野中)	井川秀樹(井川中)	入江宏明(池田一中)	西浦陽子(大野中)	三橋和博(西祖谷中)
6	尾関英知(三野中)	井川秀樹(井川中)	入江宏明(池田一中)	西浦陽子(大野中)	三橋和博(西祖谷中)
7	上田尚(三野中)	元木康代(三好中)	村上義昭(池田中)	山田泰弘(山城中)	邊見隆史(東祖谷中)
8	上田尚(三野中)	元木康代(三好中)	村上義昭(池田中)	山田泰弘(山城中)	邊見隆史(東祖谷中)
9	三好康彦(三加茂中)	国友博司(井川中)	伊丹尚子(池田一中)	大西恭司(大野中)	島本清(西祖谷中)
10	青山貴幸(三野中)	上田美恵(三好中)	坂本浩江(池田中)	田村裕(山城中)	大谷一幸(東祖谷中)
11	平尾治美(三加茂中)	藤本恒幸(井川中)	尾崎真紀(池田一中)	新見哲也(大野中)	大倉俊之(西祖谷中)
12	宮成万寿美(三野中)	川人勝久(三好中)	内田公生(池田中)	白井正道(山城中)	宮成誠樹(東祖谷中)
13	玉木富美子(三加茂中)	川人祐子(井川中)	西岡ひとみ(池田一中)	板東祥子(西祖谷中)	
14	辺見俊二(三野中)	入江宏明(三好中)	川人恵美(池田中)	根津道子(東祖谷中)	
15	坂部公章(三加茂中)	山内幸子(井川中)	高田和枝(池田一中)	大谷一幸(山城中)	
16	村上義昭(三野中)	野田圭祐(三好中)	峰友眞弓(池田一中)	安田恵(西祖谷中)	
17	玉木利典(三加茂中)	立花久(井川中)	久保喜昭(池田中)	岡本博一(東祖谷中)	
18	木藤和恵(三好中)	宮浦理恵(三野中)	沖原真紀(西祖谷中)	丸岡美枝(山城中)	
19	藤本智恵(三加茂中)	大石さえ子(井川中)	中川浩幸(池田一中)	ナサーニョ・デネヒー(東祖谷中)	
20	垂水恵子(三好中)	窪田和弘(三野中)			
21			尾嶋麻子(池田中)	山口雄三(山城中)	
22	渡辺仁(三加茂中)	近藤幸(井川中)			
23			常村淳(西祖谷中)	山口義明(東祖谷中)	
24	片山徹(三好中)	小出真理子(三野中)			
25			細川誠治(池田中)	峰友眞弓(山城中)	
26	佐藤篤史(三加茂中)	伊藤憲志(井川中)			